

記憶の生理反応と精神現象の概要モデル

永山 智一 (Tomokazu Nagayama)

所属 埼玉工業大学非常勤

記憶の生理的構造的な研究は医学、生物学、実験心理学などの様々な分野で具体的な成果をもたらしているが、脳の側頭葉における海馬の研究をはじめ、利根川進氏などによる遺伝子的な研究、あるいは心理学上の概念とそれを説明付けるワーキングメモリなどの研究などの現代的探求を経て、NHKの特集番組などにもその様々にかつ少しづつではあるが進展する状況が広められつつある。しかしながら我々が知識と呼ぶものの一部を成すその生理過程の全体像を分子スケールの標準過程として提示する方法は未だ確定されてはいない。それにもかかわらずその生理過程が生物の精神過程と密接に関係していることは歴史的にも哲学的にも十分に予測されているといえる。我々が通常では記憶という概念一般の雑多な例でしか捉えられない生物の状態記述をもとにした対象が実在するためには、具体的な生物資源に根ざした局所環境における連続的安定的な定常状態を保存およびその再構成を可能にする何らかの基本的な固定対象の存在が必然的に要求されるが、それすらも物質としての原子レベルの存在性か、化学的反應上の平衡状態か、あるいはエネルギー伝導経路の反復的励起状態か、血中分子の安定供給状態の反映なのかといった物理現象としての基幹的構成要素の特定すら予測の範囲を出てはいない。さらに記憶という言葉がそれによって名指しされる対象を指すのか、ある記憶対象を時間的に固定化しその保存という事象を表記記述するものなのか、あるいは生体の記憶対象を保持するその機能や各瞬間の状態変化を指す言葉なのかといった、どの側面をとっても様々な学問分野の基礎に密接にかかわり、しかもその事実過程の詳細が生命活動の持続そのものに重大な影響を及ぼしている観測対象であることは自明といってよい。

一方で精神現象を我々の考察対象として提示する場合、その精神現象自体の詳細および全体像を明示する必要がある。そして歴史的にその記述は具体的な生物状態の外部観測による行動学的簡易報告や自身にのみ観測された限定的かつ閉鎖的な関係情報のみの報告といった曖昧さを多く残す例が一般的であったことも認められる。人あるいは生物の推測上の活動として我々に認知され説明付けられる環境情報は、生物の現環境に沿った身体あるいは精神における一連の短い反応行動連鎖あるいは既知の慣習的動作を基にしてその始動から完了までを瞬時に実現する。そこに身体的精神的な記憶として保持している反応可能情報を用いないということは考えられないばかりか、当の生命個体が出生からその動作時点に至るまでのあらゆる記憶または記録上の反復、反射反応可能な身体資源を反映させる可能性を持つ。出生直後のなまの個体が現実の身体外部作用に反射的に反応する必然性は、呼吸という生物存続に関わるエネルギー生成のための酸素の取り込み、あるいは食物の摂取といったその後の生を継続する限り終わることの無い身体的な環境の獲得動作を途切れさせることなく連動させる。

主観的と表現される自己を我々に認識させる内在的な自身の変化のもとはこのよう
な生の必然性から反射的に機械的に継続反応し続ける自己制御機構の上に必然的に構
築される。

それらを踏まえ記憶の概念モデルをひとつ提示した上で、ベルクソンにおける記憶の
二面性モデルを一元化可能であると示すこと。また心の哲学における志向性やクオリア
といった対象を、上記記憶モデルによる生理現象としての概念モデルの中に組み入れる
ことが可能であること。さらに哲学的な人間の本性、理性といった精神活動の対象をも一
連の生理モデルの中で記述してみるつもりである。